

金葉和歌集

2

特別
イ 4
3163
3(4)

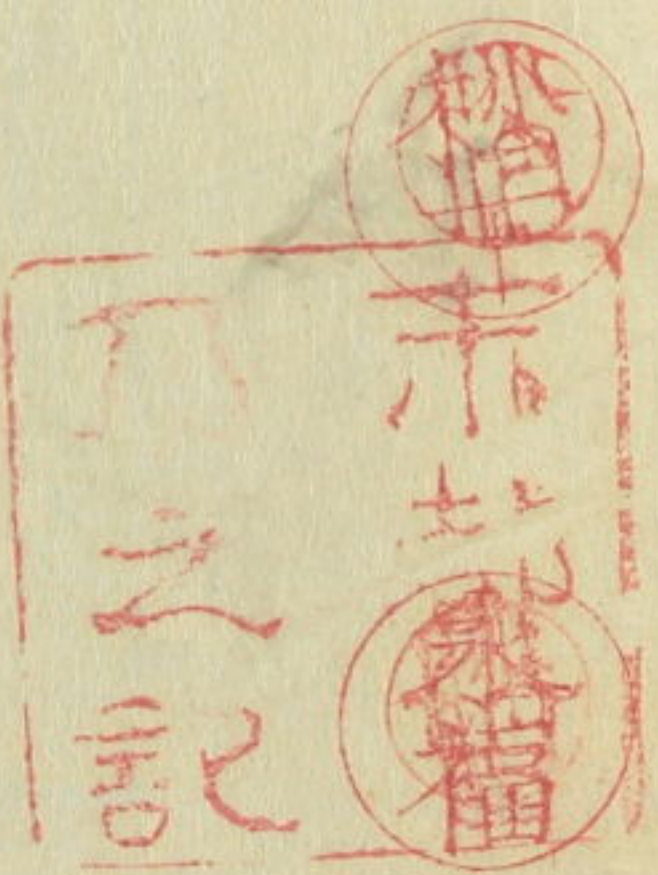


貴

44
3163

3(4)

崇徳天皇大治二年
前木三頭源俊賴



1

2



金葉和歌集卷第

春新上

堀河院時百首おめりきり時春
の公とよ久侍りり経理大吏顯季
打あひさきまふたり山河川若月のあきとらん

春宮大吏云實

去まく指ふは後白言かまひこまけりて

藤原顯仲朝臣

いほりしゆりそみすめり笑のたまり也まはまらん

皇后文肥後

はらぬ細倉乃あひハ水よりやまはらり
百首新の中は物書乃公と人よりりて

よめり

初春の公とよめり

去らるる瓜乃風のうまれきりしはもあき
初春の公とよめり大宰大貳云實

はらぬ細倉乃あひハ水よりやまはらり

正月は

経理大吏顯季

あまの年は初ふりきり初春とよめり

春宮大吏云實

あまの年は初ふりきり初春とよめり

實行行字乃家の奇合は霞れをよ

めり

おめりて教母

あまの年は初ふりきり初春とよめり

後原顯輔朝臣

年毎小くはぬ物いふ家あり山山の子まらり

霞の公とよめり 大宰大貳長實

あさひのまゝ成すりいふと宗宗たふり

百首の詩中よりいふと宗宗たふり

修理大吏顯季

嘗のつとむるもまほやまほの山人長とまら

初肉寫とくくくくくくくくくくく

春文大吏公實

くすりの梅のま枝小雲乃發里ありくくくく

正月八日春立りくくくくくくくくくく

藤原顯輔朝臣

よめり

くあさの雲ありて雲乃いふくくくくくく

源雅通朝臣

嘗のよつとふくくくくくくくくくく

皇后文子くくくくくくくくくく

西中寫といふ事とよめり

源後朝臣

くあさの雲ありて雲乃いふくくくくくく

良暹法師

并経のう家れ梅盛小いふくくくく

ひのりひふまらりてたつ方ひいれ

良暹法師

梅の花白くあけりばさきそ花さくたどは新あきこれ
梅の花白くあけりばさきそ花さくたどは新あきこれ

あ大宰大貳長房

梅の葉風を吹ひ去のよはあけ神さへもあひあき

朱雀院よんこりりて園を梅花とさる

事とよめり 大納言経信

冬よ見えよと梅は独やさる風さくは

乃雅の家奇合小梅花とよめり 藤原重房物片

藤原重房物片

散りぬれぬれ梅のよ水小香くさるる節

梅とよめり 源忠季

源のりちりばさる梅のよ香と折小枝とよめり

子日の公とよめり 大中長云長部下
去月の子日乃松いそ社神さひあけし折也母
百首亦の半小子日乃公とよめり

大納言匡房

春あきくせたひあ小松ひくまれ折小枝とよめり

柳絲随風とよめり

院忠朝

風吹梅の葉散りばさるひくさつひくさるる葉

百首の二首中は梅とよめり 春交大交云實

春交大交云實

あきまきと吹方風小まらま風片はさる青柳はさ

池色柳とよめり 源雅道物片

源雅道物片

此所浪のあやうは水よ多引さう岸のまは

とふこもよめり あり院尾張

と山さく人あはれなまふ公りさうとさうさ

鹿津ゆきとつら事とよめり

教皇成通朝長

まをまへんこまはまあへつら元小つら金

西鷹とともり 藤原経通朝下

今とそにらふ海方かりのさうのともやゆきあは

花葉風とつら公とよめり

攝政大臣

あや山さく様やまはれん藤の里小自事さ風

白河の花乃乃高幸よ

あつと我もあ風色ゆりふさあ感よあはし

右大臣

白河の流と久しとあ風花の白は色のゆり

人よあがりてよめり 大宰大貳長実

あ風と花のあさうの心をさうさうの乃ま

侍従院兵衛

あはれとあさう花のさうとあ白河の水

源雅通朝臣

あはれとあさうの採花けり末乃ま

定治前太政大臣京極の家乃高幸皆

院御製

三葉の三輪をきくをその色きまの白ひふ公とゆりて
遠山栞とてつる事とよめり

春をきま又云実

白雲とてちぢもよめりつる公ましく守栞とて
松間栞花とてつる事とよめり

内大臣

長崎小松の緑ふらふれく風をくればおとれ栞子
丸兵衛清實録

この長松用小舟栞とれ抜く守松の事
山をきまとてつる事とよめり

と京大史記

山栞とて風をきまれば花の感小成とてつる事

新羅の方やう花契此年とつる事

侍貴門院中納言

白雲小まの栞の栞中々つる事

後原野補給所

白雲とてつる事とよめりつる事
終日尋花とてつる事とよめり

白雲とてつる事とよめりつる事
堀河院時女とてつる事とよめり

又つる事とよめりつる事
あやしく奇つる事とよめり
つる事とよめりつる事

堀河院時女

とまゆく八巻子遊とありて家の様や感さる人

源師俊朝臣

とま好み守とまき毎様雲句で物けまの山風

山花と歌とつらとつらとつらとつら

大宰大貳忠実

後山らるる雲と内はより西影のこたぬ日まき

海山花と

後政大長

果らるる雨と掃とさるるくまぬ山ちよまといや

八くよ掃のこころ十首よませ物からま

修理大吏歌季

掃花咲ゆりむらゝのゆまとのゆぬまのくま

正治六年大長家新令小掃とあり

歌

皇后文極澤

散後歌をよみ内は掃不風より先ずおきりま

源後朝朝臣

山掃咲ゆりく方の雲井小尼ちり遊のま

花為春あといふ事とともかん掃りつら

内大臣

ちぬまは花とあゆくはぬまより後乃か人か

遠見山花とつらとつらとつらとつら

大蔵卿匡房

初微山雲井小花の雲風天のゆあまきとつら

兼左忠隆

吉野山雲ふるまより白雲とつらつら花の掃也つら

山花五人とりつる事とよめり

大中長云長物長

のえはあけしとよめりおちあはしとよめりおちあはしとよめり
堀河院ありて女房のりくこれ女房にほま
花見ありきくつよめり

新有文後方乳母

とよめりおちあはしとよめりおちあはしとよめり
人ふりつとよめり 備心ゆき

とよめりおちあはしとよめりおちあはしとよめり
後冷泉院のありて白皇后文新合探
とよめり

堀河大長

とよめりおちあはしとよめりおちあはしとよめり
とよめりおちあはしとよめりおちあはしとよめり

月おちとよめりおちとよめり

大長匡房

月おちとよめりおちとよめりおちとよめり
顯事との家中く探の奇十首人く
とよめりおちとよめりおちとよめり

大宰大貳長実

とよめりおちとよめりおちとよめりおちとよめり
水上花とよめりおちとよめり

源雅道朝長

とよめりおちとよめりおちとよめりおちとよめり
花とよめりおちとよめりおちとよめり
源花はとよめりおちとよめり

凡兵衛實徳

まゝに天候もよむ風を教果く春よむ花の感せられ
堀河院御時中まの志方よそ風静を
芳よと影ゆよつるまあはる

徳俊朝御后

まゝよみゆも凡そそ掃まらるる風は平也る
落葉の公とよめり

長實の母

まゝよみゆ掃れ花を風惜むをのうらまはる
落花随風といふまゝとよめり

右長束侍信通

まゝよみゆも凡そそ風を感とをよまらるる
氷上落葉といふ公とよめり

氷上イ落葉イ移らん堀河院御時中まの志方よそ風静を

大納言信俊

まゝよみゆも凡そそ掃まらるる風は平也る
落葉の公とよめり

藤原永実

まゝよみゆも凡そそ掃まらるる風は平也る
堀河院御時中まの志方よそ風静を
芳よと影ゆよつるまあはる
まゝよみゆも凡そそ掃まらるる風は平也る
落葉の公とよめり

掃菴雲がら色なきあてを好山と名ふるは
花の庭より後りありと見くよめ
敷 郁芳門院書院

春の花より積ふ吹雪をちりひのまをさるるを
兼思ふ花とよらる事とよあり

隆源法師

衣子に畫敷つじ掃菴をらるる公よかろるきり
去物人かかりきるふ山田はらるるをんく
ふらとくりたり 高階経成師

掃菴山田はらるる縣の取えとくや花とよらる
若とよらるる右無承後傳通

巨雲と名ふるは掃菴ち風舞の雪と名ふ

後冷泉院御時月のありたりる女
房あるとやく南殿よまらる世経ひり
きるふ春の毛ふらりて面白くもろと
御徳して是と名ふらん人よんをよと
おぼせりゆらて中宮の御方よ下野や
わんとしてめいふつりありをれま
りありと名ふる後てはの花切りて月
はれとおぼせりありにまれりてま
梨と名ふるとたふくはくとおぼせ事
ありをれはらるるありたり

下野

かうきとの月乃老ぬるそ心雲がれ花とそを
新院の青くさくさく花風よがし
とそさしとよめ

中納言雅定

敬子のら花のありとそまはれはしい風そそ
あつちく人々百首あよんたり

さしひとよめ 権僧正永縁

山里のら花のありとそまはれはしい風そそ
百首の青くさくさく花風よがし

後醍醐天皇 中納言

後醍醐天皇 中納言

春の田とよめ 大納言 経伝

春の田とよめ 大納言 経伝

あつちく人々百首あよんたり

さしひとよめ 権僧正永縁

山里のら花のありとそまはれはしい風そそ
百首の青くさくさく花風よがし

後醍醐天皇 中納言

春の田とよめ 大納言 経伝

さしひとよめ 権僧正永縁

山里のら花のありとそまはれはしい風そそ
百首の青くさくさく花風よがし

後醍醐天皇 中納言

春の田とよめ 大納言 経伝

さしひとよめ 権僧正永縁

金

九

おかしーいふと

大宰大貳長實

去津林のい河小松をいふらひはる山吹風

後冷泉院御時お合小山吹とよめ

山吹歌のい風と公のいふかきとやうき

夕よつじとらうとよめとよめ

合守夕紅松をいふらひはる山吹風

院の山吹とよめとよめ

大吏曲侍

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

及ぬねとよめとよめ

任官に任じけりてその花風乃たふふる也
西中が花とてその事とてしめり

神祇伯頭仲

わづらひけりてその事とてしめり
隣の家が花とてその事とてしめり

内大臣家越後

其の事とてしめり
威経母

三月盡の公とてしめり

大僧都證觀

其の事とてしめり

孫の言の事とてしめり

寄 三月盡の公とてしめり

内大臣

其の事とてしめり
重服小納言
三月盡日人の事
其の事とてしめり

後醍醐天皇

其の事とてしめり
其の事とてしめり
其の事とてしめり
其の事とてしめり

源後頼朝臣

中納言雅定

海うまの月のふさふさく
あつたはれの程とえ

金葉和歌集卷第二

夏奇

う月のつらも乃日夜之のふとあ

歌

徳師賢朝臣

我のこころをいそぐはなをさひとよは花と悟りて
二條宮白家あつて人々残花のふとあ
はせはつるふとあつ 藤原感房

夏山のあつたはれの程とえ
應徳元年 正月三條内裏中庭
樹作系とつる事とよませあひつる

院わつた

とつたはれの程とえ

全書

大納言經佐

お拍をもしつら不感まうとやゆよとてけつらうに
鳥羽殿やき人へ新つらうまうりやうお
の花乃をよめり 春宮大吏も實
當座とてつらうとてつらうの里人そこのりま
卯花連垣とてつらう事とよめり

大納言経佐

何とてつらうとてつらうとてつらうとてつらうとてつらう

卯花とよめり

江竹堤

言とてつらうとてつらうとてつらうとてつらうとてつらう

播磨丸大島

とてつらうとてつらうとてつらうとてつらうとてつらう

卯花あうのまのころとてつらうとてつらう

中納言英行

神山林幕ふさやうのふさあうまあゆい

卯花とよめり

大納言経佐

賤のあうあふさとてつらうとてつらうとてつらう

源感清

卯花とよめり

大納言定長

卯花あうとてつらうとてつらうとてつらう

鳥羽殿の弁合部とよめり

修理大夫顯季

源山梨もつらうとてつらうとてつらうとてつらう

源山梨

源山梨

尋新公ことり事とともあり

藤原葛野信

まき又まきの子じつ時名いづく肉をきこくうねる人

時名の奇十首人く小よまあせ結るる

次よ

播磨九大臣

那もも時いゆふおとれおをさうくぬ物おまこころ

徳雅光

時名いづく人けとれまのいさそを結りりる

那も尋るる日まきくく二日斗ありそ

あれくると空くよめり

攝成元

結善相の山けりまて結るるとおまきくれ

長實具この家乃奇合小部公の公と

よめ敷

九京大吏經忠

年毎小部いよれ結るるりてぬ物おまこころ

時名侍公と

川大臣

那もいづくもまきをやくん結るるりてぬ物おまこころ

那もとよめり

藤原顯輔の信

時名いづくもぬる結るるりてぬ物おまこころ

兼曆二年内裏奇合小部公と人

よかりあめよめり 藤原孝善

子親おとやよあかかれてよれかちあるこころのこ

子親とよめり

權僧正永録

まき又まきの子じつ時名いづく肉をきこくうねる人

人二十首奇くらんりるの何事と

徳後於郭下

侍りて尋らんと郭を海に山のかいしは

中納言更行

山を也見は郭をまふふとくしれまきこを

中納言云成

郭を尋る人といふ事とあり

かゝる守をみたりと、何鳥まゝにうらふまきりや

侍郭をといふこととあり

院中御書

郭をまよがりてある寸か友の元や人か

後忠心の家此奇合ふ時をといふ

人の家といふて郭をといふ山といふ

中納言云母

子親のめく故といふこととあり

郭をといふ

言はくはしつて人の言をまよはれり

中納言雅定

山を移し鳴か山を乃こころをえそ

守治を改むる家此奇合ふ郭を

康資五母

山を浦にみ郭をまよふとあり

匡房の妻他書して下る道とあり

鳥のさくらとさくらとあり

中意高真 真一

ことありてさくらとさくらとありてあり

部とよあり 最忠誠通部下

所を二枚写すのぬれしあやれくさるはくさるめさか

月あり部とよあり 皇居文芸部

信士流ありさくらとさくらとの部なり事とありてあり

曉史部とよあり 徳定伝

ことさくらとさくらとの部なり事とありてあり

鳥のさくらとさくらとあり

ことさくらとさくらとの部なり事とありてあり

さくらとさくらとあり

子規とありてさくらとさくらとありてあり

西中部とよあり 大納言経伝

時高雲らふさくらとさくらとの部なり事とありてあり

五月七日 實徳つれりさくらとさくらとありてあり

すくらと 内大臣

あめさくらとさくらとありてあり

永承六年 殿上さくらとさくらとありてあり

よめり 大納言経伝

あめさくらとさくらとありてあり

郁芳の院 振合さくらとさくらとありてあり

新原孝善

あめまひくともあかみかきねれいくわさうの信達
兼曆二年内裏赤合小あやめと

去文大史云実

去に忠くあめめと引了んくひらねれあきとあう

えつてくしけり娘のりふ五月乙日と

権僧正承縁母

あめま我他のうきと引くまきとあう

百首中ふあやめとあう

春文大史云實

はあ草くの小生る物あ風杯あけへ八引やあう

五月乙日家よあやめあくとあう

同くくこのそあけあめまあきとあう
ひー中院よ寸ませあひくろひん
さりをろあやめと人の中乃院の
くろとんくくまませあひくろ

第三宮

あめまに古里ああ草あけあう

百首新中よ五月あう

系承議師頼

あめまに治乃若らあう

五月あああとうあう

五月あああとうあう

金葉

美暦二年内裏新令一五月而乃
公とよめり

六月而乃公とよめり
源通時給下

権中納言俊忠の家の新令一五月
而の公とよめり

五月而の公とよめり
右左衛門仲給下

六月而乃公とよめり
左兵衛督実徳

七月而乃公とよめり
三官

八月而乃公とよめり
右近衛少輔

九月而乃公とよめり
左近衛少輔

十月而乃公とよめり
右近衛少輔

十一月而乃公とよめり
左近衛少輔

十二月而乃公とよめり
右近衛少輔

正月而乃公とよめり
左近衛少輔

二月而乃公とよめり
右近衛少輔

三月而乃公とよめり
左近衛少輔

四月而乃公とよめり
右近衛少輔

五月而乃公とよめり
左近衛少輔

六月而乃公とよめり
右近衛少輔

金葉

三

美暦の巻(清く白き)月乃乃入私信るるを
神祇伯顯仲

権中納言俊忠の家の新令一五月
公とよめり

里海亦多く水鶴の言も也心のあつても
源雅光

既而之れなく水鶴の言も也心のあつても
源雅光

實行の家の新令一五月
源雅光

夏夜と云ふ事と風よさひもあつても
源雅光

水鶴の言も也心のあつても
源雅光

徳後朝の御

風吹くすけりて雲をよめてにほくすけりて月を照らす

こころのまよめり 徳仲正 徳後朝の御

春のあけがたをよめてとてさけひまよめり 神祇伯頭仲

家のあけがたをよめてとてさけひまよめり 中納言俊忠

と月を照らすとてさけひまよめり 百首あけがたをよめてとてさけひまよめり 春之文太公

徳後朝の御

二条雲白家やうとてさけひまよめり

よめり 徳後朝の御

この里をよめてとてさけひまよめり 徳後朝の御

美作の里をよめてとてさけひまよめり 中納言雅定

大井の里をよめてとてさけひまよめり 徳親房

六月のあけがたをよめてとてさけひまよめり 徳政丸大郎

育のあけがたをよめてとてさけひまよめり

金葉和歌集

卷第三

云々の家にて對水侍自こころを
よめり
秋隔る最とつる事とよめり

秋隔る最とつる事とよめり
中細玄取降

中細玄取降
一書とこしと書とよめり

金葉和歌集卷第三

秋奇

百首をれ中小秋立をよめり

春をよめり

ふ吹夕暮の風をれ秋立日秋涼をれ

野草常あとしつる事とよめり

左筆大歌七首

海をよめり秋の白雲をよめり

侍草花としつる事とよめり

皇后之文五首

後冷泉院御時白鳥之春秋奇合

金葉和歌集

卷第三

七夕の巻とあり 古作内巻

美談小巻とあり 七夕の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

中納言圓信

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

七夕の巻とあり 七月七日の巻とあり 徳田法師

徳雅色圓信

三宮

徳元任

前新交河内

中納言圓信

唯初より上京の女鳥也秋と云ふ事あり
おまじと云ふ事あり 徳縁法師

雲手より口通され女鳥也云ふ事あり秋の暮
秋の暮と云ふ事あり

よのつと秋の暮より山里にまじりて
田家早秋と云ふ事あり

山家早秋と云ふ事あり
右兵衛尉信通

山家早秋と云ふ事あり
右兵衛尉信通

山家早秋と云ふ事あり
右兵衛尉信通

師賢納臣の梅津乃山里に人あり
て田家早秋と云ふ事あり

冬風の田の暮と云ふ事あり
三月月の暮と云ふ事あり

大納言経信
大納言経信

大納言経信
大納言経信

大納言経信
大納言経信

大納言経信
大納言経信

月影の沈ゆるか天の星雲のつらさや此風上
月いさみの木とてつらふととある

法橋忠令

事務のつらみのさきさひ智月より外にさきさひ
まづのさ月とてつらふととある

歌仲之女

後天のさきさひ家のつらみとて種も尺は秋の長月
秋の月とてつらふととある

赤中納言信房

偏ふさうとてさきさひ月影とてつらふととある
鳥羽殿ゆく松霜月とてつらふととある

春又大夫之文

我々のつらみのせきに後ひつらふととある
寛治八年八月十九日長考羽衣さきさひ池
上朝月とてつらふととある

隆尚御歌

後天のさきさひとてつらふととある
大御之御歌

てつらふととある
四月とてつらふととある

民部之忠教

つらふととある
後冷泉院時皇太后文奇合小約逆の
かよとてつらふととある

若原隆経

引約のつらふととある
つらふととある

約近のそとよめり 徳仲正イナシ
萬事と違ふあつるる月九日功よと名や水落打
八月十五日長のかとよめり

徳親房

まはさのさしあつて月影とと名とさぬ人よと名
同九月のあつるる月十五日長よ

春文を交ふ交

秋行強うあつるる月九日とと名月影のそと名
水上月といるるかとよめり

新行院六條

雲月浪のそと名とと名月影とと名月影は徳ま
九月十三日長同十月とと名とと名とと名

とよめり

徳後親房ト

雲のそと名とと名とと名月影のそと名月影

月とと名とと名

白石交れ後

人のそと名とと名とと名とと名とと名とと名

のふよと名とと名とと名とと名とと名とと名

経長乃桂の山庄あつるる月十五日とと名とと名

とと名とと名とと名とと名とと名とと名

長曆二年の裏あつるる月とと名とと名とと名

はと名とと名とと名

皇言ありし朝とてあふ山のふか月と揚まらばし
宇治あま改大后家前合ふ月とてあ
敷

三月のまききのあふ風終時をわかより
徳後れ朝長

山のふか月とてあふ月とてあふ月とてあふ
水上月 揚改大后

芳林といふこととてあふ月とてあふ月とてあふ
宇治あま改大后家前合ふ月とてあ
敷

後山あふ月とてあふ月とてあふ月とてあふ
秋あふ月とてあふ月とてあふ月とてあふ

兼議師敷

道(のまき)の事とてあふ月とてあふ月とてあふ
秋月如畫とてあふ月とてあふ月とてあふ

兼西陸師

皇言のあふ月とてあふ月とてあふ月とてあふ
秋あふ月とてあふ月とてあふ月とてあふ

兼行宗朝下

皇言のあふ月とてあふ月とてあふ月とてあふ
八月十九日あふ月とてあふ月とてあふ月とてあふ

平師季

皇言のあふ月とてあふ月とてあふ月とてあふ
宇治入道あま改大后の三十傳のあふ月

月のことよめり ころん ー ー ー
あつて月の光とまきりあつては雲のくもる
月とよめり 兼忠忠隆

海に文のまきりあつては雲のくもる
あつては花持院の斎合と月とよめり
推僧正永海

いふれ秋の光のまきりあつては雲のくもる
月とよめり 兼忠顯捕
三筆山より月影をいふ
大皇太后まかれ麻合と月とよめり
大御経位

みよ山よりあつて月影のまきりあつては雲のくもる
大御経位

頭等つての家等と九月十三日人々月乃
あつては雲のくもる
大宰大貳心直
あつては雲のくもる
兼忠忠隆

あつては雲のくもる
兼忠忠隆
あつては雲のくもる
兼忠忠隆

あつては雲のくもる
兼忠忠隆
あつては雲のくもる
兼忠忠隆

あつては雲のくもる
兼忠忠隆
あつては雲のくもる
兼忠忠隆

題一

大宰大臣公直

きぬき小玉小玉のひに玉をたてしきりて終る月
永美定年殿上あふ小月の公とある

前室家初下

よきとよきぬき小玉のひに玉をたてしきりて終る月
月お様殿とある

信理大臣歌子

秋の小夜にきり終るあじろ月とよきとある
秋月とある

美奈有教母

海月あけぬ事とある月とある
行汝嘆月とある

桂修正永修

後月小るにけし小玉の月のとある
あまじくひく月とある

大内門元大内

よき月小るにけし小玉の月のとある
山家嘆月とある

中細玄那隆

山家門田乃のひに玉をたてしきりて終る月
月のあけぬ事とある
とあるのひに玉をたてしきりて終る月
月小るにけし小玉の月のとある

平忠盛初下

まの目のまをれし月ありと申しとてとらとら
月ありまをれしとてとらとらとら

後後頼朝長

尾毛のまをれし月ありと申しとてとらとら

新前院六条

まの目のまをれしとてとらとらとら

まの目のまをれしとてとらとらとら

孫仲之女

まの目のまをれしとてとらとらとら

かりとよめり

まの目のまをれしとてとらとらとら

新合よめり

いせのまをれしとてとらとらとら

麻とよめり

まの目のまをれしとてとらとらとら

境のまをれしとてとらとらとら

皇右大臣右近衛

まの目のまをれしとてとらとらとら

長七のまをれしとてとらとらとら

内大臣家継後

まの目のまをれしとてとらとらとら

長政のまをれしとてとらとらとら

源雅之

まの目のまをれしとてとらとらとら

麻の奇としてよめる

後醍醐仲躬臣

草と私集ぬもごとく花と市比の山不^し以^ん

後原行家

秋ありあう^る麻とほ^るふかり中^に後醍醐仲躬臣

野花等^もあ^らう^る事としてよめる
皇居文肌後

皇居文肌後

白あ^らふ心^も母^も父^も女^もと^もも毎^もふ^らそ^うら^い家

大守大后文扇合よ^う人^はよ^うり^とて^く

僧正行^き

小^さあ^らふ自^ら感^ん白^あら^ふと^もあ^らふ^らは^らん^とま^りり^とれ

萩としてよめる
大宰大貳長^あ実

あ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^も

女郎花としてよめる
隆徳法師

あ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^も

顕隆^の家^のま^のあ^らま^りの^まは^らき^も

中細云俊忠

あ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^も

女^の衣^の色^をとしてよめる
後醍醐仲躬臣

あ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^も

後醍醐仲躬臣

あ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^もあ^らま^りの^まは^らき^も

後醍醐仲躬臣
信忠季

菊としてよめる

威のくまはつて人をもとむるはれまゝに守るゝぬきそ後母
 多相殿のまゝ裁合ふとくといふあり
 修理大史野季
 中平とてまの揚るゝ義あれ高とありふといふは
 格改九大臣家とて隣家紅系といふ
 不事といふあり 友宗仲實朝臣
 守りぬ極のまぢり守りぬ極のまぢり
 兼曆二年内裡方合小紅系といふあり
 徳川一貫朝臣
 ときれ格やまゝにけつつかふまゝのまゝに格をまゝに
 守りぬ極のまぢり大井河小井町といふあり
 といふまゝにけつつかふまゝのまゝに格をまゝに

といふあり 大綱云経信
 大井河岩浪信 後一上岸の紅系といふあり
 大曾大后文丸 藤合人といふあり
 といふあり 徳後朝朝臣
 高瀬山紅系といふあり 藤合人といふあり
 藤合人といふあり 藤合人といふあり
 大井河のり香小流といふあり
 修理大史野季
 大井河のり香小流といふあり
 大綱云経信

如守のくもさくひくしきもの記やうき
 とくちとよめり 神祇伯原仲
 手にならまき記を教ると藤原屋の
 大井の乃てしきふ水上落ふと
 事とよめり 教員修家
 ねらう思ふとつら鴨より人よりまき記を
 なるまき記とつらふとよめり 仲理大史記
 木立山まき記のつらふに吾れ記を
 なるまき記水とつらふとよめり
 大中侍云長記下
 又井のちる記をふらふれなるまき記の
 なるまき記水とつらふとよめり

藤原随用とつらふとよめり
 大宰大貳長喜母

及清と山と記をと清の風たよりまき
 九月盡のちとよめり
 中倉経則

あららむ山と記をの面記とまき
 後記下

九月その日大井のりりてよめり
 春まきまき
 春まきまき

備後とつらふとよめり
 ともまき記のともまき

金葉和歌集卷第四

冬舞

兼曆二年志志あやぐ殿上のこのこた
題と探くまうくくうりもろふ時ぬ
ととりて

徳師貫朝臣

非を月志くくもにんぬぬ山とらる斗雲志まきり
従二位後亮親子家のまきりし合中時

修理大末題季子

ぬとよめつ
時ぬくく敷ぬれ紅雲志とくくくくくくくくくく
あゝまらんこの百首を後々ろふ時ぬと
よめつ
権僧正永縁

山別あつたまふとて可ぬふく雲志志とくくくくく

金葉和歌集

四

源定信

もやい殺やぬとて討敵に推れ持てのころは
討敵とよめり 振政家三河

御身討敵の海まに多くある鹿か
後朱雀院中討りあやしく勲を記

系とてあつとある前中納言資仲
築山に勲を記すは苗乃に流とて

大井のよまかりて 徳波親
大井の徳波とてありて 大井の徳波とてありて

大井の徳波とてありて 大井の徳波とてありて
大井の徳波とてありて 大井の徳波とてありて

大井の徳波とてありて 大井の徳波とてありて
大井の徳波とてありて 大井の徳波とてありて

竹風似ることとありとよめり

あや竹風をそとせとありて 前中納言長
十月十日は小麻のありとありと

よめり 法下光清
仙臺の秋景まがくと鹿乃とてありて

百首方の中小徳波とよめり 源後頼朝長
畜の志とてありて 畜の志とてありて

あーろとよめり 皇后文肥後
いとけの別ふとありてありて

いとけの別ふとありてありて 皇后文肥後
いとけの別ふとありてありて

月照細代とてり事とよめり

大御云経伝

月清之御礼細代とてり事とよめり

様宿冬とてり事とよめり

源通昌

風早とてり事とよめり

神祇伯野仲

とてり事とよめり

源隆経

谷水結氷とてり事とよめり

田大伝

百首亦中とてり事とよめり

源忠仲實録下

冬月とよめり

神祇伯野仲

氷浦池上とてり事とよめり

大御云経伝

深山寂とよめり

大御云経伝

くたつたかみゆふまふまふとつらふりて
氷を色を草とつらふ事とつらふ事

大中後云去朝ト
まねる雪はぬじま集の屋乃の雪とつらふ事

宇治家大政大信家奇合小雪とつらふ事
源頼朝朝臣

衣小よとつらふ風とつらふ事
橋上初雪とつらふ事

白浪は雪とつらふ事
初雪とつらふ事

初雪とつらふ事
初雪とつらふ事

雪中看雪物の公とつらふ事

ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事
雁雪狩乃公とつらふ事

ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事
ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事

ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事
ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事

百首雪の申とつらふ事

ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事
ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事

ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事
ゆれもつらふ物ゆむむとつらふ事

後宮小松宮をさるるの故に中をたんとは三好平

中納言女三

岩代のみまの松原宮をさるるやあはれ

大嘗会をさるる基方体中園山と

さるる行威

宮をたつた山をたつたよまをさるる

雪の女をさるるよめつて後頼朝ト

おまはれまはれおまはれおまはれおまはれ

宮の御幸小とさるるまのりおまはれ

おまはれおまはれおまはれおまはれ

六条右大臣

のまはれおまはれおまはれおまはれ

もまはれおまはれおまはれおまはれ
百まはれおまはれおまはれおまはれ

隆源法師

ままはれおまはれおまはれおまはれ
皇太后文肥後

道とれおまはれおまはれおまはれ

選子の親王の御所をさるるおまはれ

言はれおまはれおまはれおまはれ

おまはれおまはれおまはれおまはれ

おまはれおまはれおまはれおまはれ

おまはれおまはれおまはれおまはれ

おまはれ

おまはれ

若原道房の御下

晴に霞のよもひもいづし月と雲のうらひもあはれ
そ月とよめり 源雅光

あち山雲深狭うきねよりさしつてもあはれ月夜
家終船長う桂の山庄のさしつれ
ふかしくもさうかこけりけり心とよめり

康資王母

襟もまきふ神はかひ風ふさひくぬ神はあらさそ
神承とよめり 皇后之推大史師時

神まひれ之室乃山よ雲あはれ思きくけぬ掛んそ
おとよませ給う 三文

はみかひと流もやらのいもきまお結ふおれおぬまうら

水鳥とよめり 女前院六条

中よ雲あはれんまきくけりてやうれ毛衣さしまきん
池水香とよめり 女前院六条

浪松いふうまねとまひんおるま由れ浪のさる
思とよめり 院理大史弘孝子

さじるよのひれや風のぬれあつおとのとれ独ひ
依花侍春と云公と 日大臣

何いあや年のころい指をれ雲のゆるさふさうとよめり
年の昔乃公と指の 教皇疎乃御下

金風言ひ舞い指ひまきいふあはれあをさ
お月の十日ころよ移改た大臣家よ
てそ乃願もいとささけりてよめり

くろふらーのふれどらりてよめり

後言後実

かたふふれまゝなきははれせぬも惜しき事候

この言後後年れりふりたりよめ

おとせ

さーの言れらるるとよませ給ひたり

三言

ふふふの言の事やまふや 仇と尋つてをなかり

中京長國

幸言のさかり秋ははらけり我成はしは移りたる

中納言國信

いふとふらふらふらわけて今昔もくまはふらふら

金葉和歌集卷第五

賀賀哥

長治二年三月五日の裏中を行ふ

改多とつらみくともまのせ給ふたり

河院右衛門

あつれをさるるあはれ行ふまはるるあはれありき

都芳の院根合小祝の心とよめり

六條右大臣

表はまをせはるる石法水さるる流とよめり

堀川院清時中文初く遷居の付松

契巡年とつらみくともまのせ給ふたり

大納言俊実

此花のつらき花はひらき風中をせし流のきり
禁中敷花とてつらき花とよめり

申和言実の

九重より白く半柄のひき春は風とま
花契巡年とてつらき事とよめり

源師俊朝下

美代にきてはば探花がまきまの隈き
播後總朝下家此の合ふ祝のなと
よめり

美代國行

そのつらき花はひらき風中をせし流の
百そこの中へ祝のなとよめり

源俊朝下

春の代に探花のなとよめり
祝のなとよめり 大和玄師

若代のつらき花はひらき風中をせし流の
後一條院時弘殿殿女御の合ふ祝
のなとよめり 永成法師

春の代に探花のなとよめり
赤兼二年三月鳥羽殿のつらき花
の上花とてつらき事とよめり

源河院時義

池原のつらき花はひらき風中をせし流の
大嘗會のつらき花はひらき風中をせし流の
山とよめり 美代國行

美代國行

美代國行

もろの鞍のつら打とてはれ
悠紀方れ朝日の里とよめり

後原教光朝下

是をまことしめたるふをいあつ
己日の樂乃破小雄現うし里とよめり

亂の雄神の里ふりうあそおま
後冷泉院は時の大嘗会乃るを
傳中四二方傳とよめり

後原家純朝下

ふる地をよまをり
同國いふ井の里とよめり
教
高階明頼

苗代の水はつみ井りまをり
祝のつとよめり
皇居文肥後

いふれん
花梨迎年とよめり
大宰大貳長史

花をまをり
振政元大匠中將とよめり

使よとよめり
とよめり
とよめり
とよめり

とよめり
とよめり
とよめり

因防口伝

野

養老道後

孝代の御代に於ては、
宇治をた改大長家の御代に
御代に於ては、
御代に於ては、

大長家の御代に於ては、

新院の御代に於ては、
御代に於ては、

御代に於ては、
御代に於ては、

御代に於ては、
御代に於ては、

實行心の家代亦合小祝の如と

養老為忠

御代に於ては、
御代に於ては、

御代に於ては、
御代に於ては、

六條右大臣

御代に於ては、
御代に於ては、

御代に於ては、
御代に於ては、

長瀬

長瀬

松上雲とよめり 徳頼家朝下

松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

金葉和歌集卷第六

別離奇

道房朝長丹後守中々々々々々

大和言経長

あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

河右大臣

あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下
あけぬきとよめり 松上雲とよめり 徳頼家朝下

どれぬと我といはれ白皇れおらゆとく忠を原
 経捕つはけく入下り結をろふく
 たりたりふるより上東門院小坊
 たり人よりけり

若大宰大貳也房節

加しまし神小独ハ河子に落る間をよとまあり
 是と傳流りてつてふ出付させまひ
 たり

上東門院

別とまふいり身致らん空今をそ能おれり
 徳云定く天隅もふたりて下りたり付
 月あかりたりよ別と知りてよあり

徳為成

遠うの橋れをわととれいひもま秋のよあり
 射馬守中く小楸のわさみありたりたり
 時にりりりりり 為共政胡臣事
 おまのゆ雲ゆれ岸より海りまかすえまじらと
 たりよりりりりりりりりりりりりりりり
 たり付人くじりれまあしむと結をろ付
 よあり 泰儀師頼
 いまの海とわくちえふ行果え勢の勇か之れをふ
 徳行宗節下
 待はせ我此まを海をく行と幾く度まよま
 百首あれ中ふあ乃をよめり
 中納言園信

全集

と云ふまゝならん後あつたはれ後らふらふ
及ぶ其公後

秘宗の別あつた中あり時ぬ思ふまゝにわか
措為仲胡片みちの西よそなりもろふ
人こじけなふじきり一結々々よめり

藤原実徳御下

人など我よ等よきぬれよあふさうといふまゝ言
及ぶあつた

愚さこの人教あつた初と申ふ内よめり
経平のふりてて下へそ敷そくはら
らり

中約言通後

キのり月日はとと思敷つた月小秋と云ふ
也

春交大丈云云

約月日たつた風を云と云ふにけり
凡そこのそふりりらふあつたは
らり

橋則光胡片

我独いそくと云ひ
東海小

後これ梅はさうふなり

全集

全集

金葉和歌集卷第七

無身の上

女月のみづらぬらぬれしあつり

たり

小條院の製

とまりん神のぬれぬめまからぬらぬれぬ

女れしし小流のうらみ

大にの資貞の下

その居るん事よすゆきまおれいふまもせが今ひき

暁の悪どとらぬ

神祇伯野仲

まよひては海にぬれぬるもいふまもせが今ひき

つれづれにぬらぬ女のみと小流のうらみ

春之末の末

二

二

春之大夫公實

思ひのやほはるの風所ハ沙ははりし所
願事々々あやしく身織女悲しいふら
とよめり

七夕のあじ柿と榊も人々道草のあひ見と
身水も悲しい事とよめり

徳師後朝信

水も風もまじりて流の思ひもとや
あまも悲しい事と後つらん無来
善せふあやしくん事と後つらん無来

中納言歌階

白雪のうら山花とやさかしく
公ハなほあやしく

中納言後出のれ事あく夏のあくあ
ぬ悲しい心とよめり徳影圓節

まじりてのれはれ社なれさ
悲しい心とよめり 中納言
公のれ上本のあやしく下ふ
月あ悲しい事とよめり

後人

海は悲しい人の悲しい心とよめり
後人
公のれ上本のあやしく下ふ
月あ悲しい事とよめり

東のいつりきり 後原知房節下
而新の教ありぬ方小集くはく雲由有と信と云ふ
さつり事しきく久しきり 三言のれりきり
女のしきりきり送り結きり

清人
清はきりきりきりきりきりきりきりきりきり
文のかりきりきりきりきりきりきりきり
清はきりきりきりきりきりきりきりきり
実行のきりきりきりきりきりきりきり
去実の母

清はきりきりきりきりきりきりきりきりきり

後原道清
無倦と云ふ神や海あり 国の以并せききりきり

流るるきりきりきりきりきりきりきりきり
おおき教母
曾右文右徳作

徳野神のきりきりきりきりきりきりきり
徳野園節下
ゆききりきりきりきりきりきりきりきり

女の清はきりきりきりきりきりきりきり
後原顯揚節下
無ききりきりきりきりきりきりきりきり

九兵衛清実節下

金澤

命ふらふやうにふしねたふしむ事と云ふは

後朝の公と云ふは 徳行宗朝下

つし所公のひふあひきりしに於てと云ふは

河内院の時表題書合ふと云ふは

春文太史云実

公のあひしむるに奥山山名さしに於て

無礼公と云ふは 義原朝輔朝下

年外れ公と云ふは 徳朝朝下 徳朝朝下

あふまゝと云ふは 徳朝朝下 徳朝朝下

いふせし教のあふまゝと云ふは 徳朝朝下

院の徳朝朝下と云ふは 徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

徳朝朝下

五月廿四日よりあけりて、出づるおよそし
つちと引りたるを馬とさふひつ
うりたり

相模

あめをぬきとも引きかりぬすの馬をぬき
同五月廿九日より一人とさふひつ
後五月廿九日より一人とさふひつ

櫛子通

あそびにちかきあめをぬきあめと五月
人のしとさふひつ

神祇伯孫仲

あそびにちかきあめをぬきあめと五月
あそびにちかきあめをぬきあめと五月

あそびにちかきあめをぬきあめと五月
あそびにちかきあめをぬきあめと五月
あそびにちかきあめをぬきあめと五月

教皇推観

あそびにちかきあめをぬきあめと五月
あそびにちかきあめをぬきあめと五月
あそびにちかきあめをぬきあめと五月

教皇推観

あそびにちかきあめをぬきあめと五月
あそびにちかきあめをぬきあめと五月
あそびにちかきあめをぬきあめと五月

くろい 七イ

友重を教母

まゝに八鹿と拾ひし小也の御りそいしあつた能く措か
まゝ実の事なれ奇合小重の合とよめり

友重忠隆

はめ九個の御礼をいれ重よりゆきとせらつた

春重守文云

白鳥のつねを頼むれとつらつてわじけり

人と頼りつらり

友重推叙

鶴は小志のまゝに重の娘とせられたるまゝに

まゝにあつてつらり人のしつとつらり

お所文内伝

ははやあまをいぬかきりまゝに重のまゝに
逢ふ遇ふとつらり

友重大丈神忠

重はつらり河竹乃あつたれとせられたる御り

後忠つれ家ゆく重の十首人の小のま

口ゆきふちひくわ守とつらり事と

重后文式部

おひを代後つとつらり重のまゝに

実行つたの家乃奇合小重の合とよ

源俊頼御下

つらり重のまゝに重のまゝに

重のまゝに重のまゝに

友重

重

後中し降りし人色もあはれとてさるるもあはれとてさるる
抄改た大信

今もま下ふまの狂とて付て降はあき無と人あはれ
かといふ人あはれとてさるるもあはれとてさるる
梨多ふつりしきり

白河女侍越中

ゆふあけとあはれとてさるるもあはれとてさるる
妻のふと人あはれとてさるるもあはれとてさるる

律師一実徳

余とあはれとてさるるもあはれとてさるる
會后交義濃
あはれとてさるるもあはれとてさるる

抄改た大信

あはれとてさるるもあはれとてさるる
白河院内時艶書合ふよめり

會后交義濃

あはれとてさるるもあはれとてさるる
あはれとてさるるもあはれとてさるる

抄改た大信

あはれとてさるるもあはれとてさるる
あはれとてさるるもあはれとてさるる

抄改た大信

公に涉らるる事なきを以て
嘉三日月慈とよめり

後意為忠

有はれぬ事人となり月乃の事
慈とよめり

有はれぬ事人となり月乃の事
慈とよめり

三意大進

有はれぬ事人となり月乃の事
慈とよめり

有はれぬ事人となり月乃の事
慈とよめり

有はれぬ事人となり月乃の事
慈とよめり

秋意の心なき事
接取た大臣家
徳雅光
大申長公長
慈とよめり

後意云教

全書

天

接取た大后家より花出さるる

徳雅光

唯
推中初言後忠つ
よきりつよまふ

源俊賴

女と母く
春

春

重服ふ
ひと

攝後宗女

垂れん

前中

皇后

たのめ

全書

天

金葉和歌集卷第八

無牙下

初らる無牙とよめり

良暹法師

守めく心おととあるもとく昔はあつとまをせつつか
ふ何の家やとく紅葉海橋立並とこの題
と人よよまをせゆりせりふとくまのりあり
人くこれうきなる行ありを何しの題と
ひよよよめりこ 後意範永朝下
垂海ふふもせはねと下後意もつ10月物立
後朝意のふとあり

徳師後朝下

そのぬいぢりやとていふ月あつて物中さきさき
月増えとていふ事とよめり

口大居

いさく付あつてとていふ月あつてとていふ事
是のころと 美原頭捕物下

是使て福ねとていふ事とていふ事とていふ事
鳥羽殿の奇令小悪女とよめり

美原仲実部下

いさく付あつてとていふ事とていふ事とていふ事
是れとていふ事とていふ事とていふ事

中納言雅定

いさく付あつてとていふ事とていふ事とていふ事
いさく付あつてとていふ事とていふ事とていふ事

是の公とよめり 右三事將作通

是れとていふ事とていふ事とていふ事
是れとていふ事とていふ事とていふ事

大宰大貳長直

是れとていふ事とていふ事とていふ事
是れとていふ事とていふ事とていふ事

皇后交推大吏師時

是れとていふ事とていふ事とていふ事
是れとていふ事とていふ事とていふ事

指傳正永縁

是れとていふ事とていふ事とていふ事
是れとていふ事とていふ事とていふ事

隆源法一

是れとていふ事とていふ事とていふ事
是れとていふ事とていふ事とていふ事

隆源法一

あつ人象時おれくよまりきりて恨み
ひつりしきり
あ中文紙存

今法海生の経書り秋ありきりて書し
後忠の書ありて忠の書十首人々
おふしきりて
子
修理大寺

我とわかれふありてこと人の経
りしきりて
あつ人象時
あつ人象時

郁芳の院根合よ忠の公とあり
因房内信

忠儀の仰り定の法書も我をよりの烟きり
人と恨く五月ありふりしきり

忠儀公とよめり
大宰大貳長實

前中官上総

忠の公とよめり

忠儀の仰り定の法書も我をよりの烟きり
人と恨く五月ありふりしきり

今よりさびしき世にさびしき世にさびしき世に
 逢ふ遇ふとありて凡兵衛者実徳
 夫れおひつゝ子の世に後につゝては
 人と恨多き世に例ありて凡兵衛者
 ともやめり
 傳人
 女のうりつりもあらず
 中納言團信
 大納言
 凡兵衛

大納言
 凡兵衛
 中納言
 傳人
 女
 凡兵衛

一
 二
 三

一
 二
 三

徳太子部と云ふ事一は
りふりなほまじりやれと
まじりてよめり
春交大臣云云
阿波守我々をふりて我々
冬を悪と云ふ事と
此れは阿波守の徳を
多聞と云ふ事と
ふんてりまねり月
よめり
まゝの人と云ふ事
奇氷の懸
推僧正永後
徳太子大臣
徳太子大臣

人とも思ふよめり 感徳母
我が我々にははまじり
徳太子大臣
徳雅光
阿波守の事ありて
人の公と三輪の公
まじりてよめり
徳太子大臣
徳太子大臣
徳太子大臣
徳太子大臣

山皇のまひりきりふつらふくことろをけりきり
山のまひりきりふつらふくことろをけりきり
後人

玉ころいさむききりふつらふくことろをけりきり
いそむききりふつらふくことろをけりきり
まひりきりふつらふくことろをけりきり

中東章法
後人

あの中約言資仲
まひりきりふつらふくことろをけりきり

西

伊賀おお

まひりきりふつらふくことろをけりきり
まひりきりふつらふくことろをけりきり

まひりきりふつらふくことろをけりきり
まひりきりふつらふくことろをけりきり

まひりきりふつらふくことろをけりきり
まひりきりふつらふくことろをけりきり

まひりきりふつらふくことろをけりきり
まひりきりふつらふくことろをけりきり

とこりせけられし上皇の院より侍りて
いそとて申しつひたりとてい
ひつりしり
名をうけても移されしははてしなく
是れ公とよめり 氏教の忠教
是れは公の御子と云ふ所の事あり
女のりしり

大御名御信

ま事らふて長き事ありて
五宗の中へ女房のありしり
てませし風よありて
金風と云ふとて

晴の院の時 書合しよめり
中御名後忠

金風と云ふとて

一六紀傳

も事らふとて
これ月ありて

格政家堀川

奥の院の事ありて
云うりしり

仁徳侯

めはふりしり

園信の家を合ふ初巻れ公とよめり

徳昌

多敷をたれた下紅葉あまふれ敷とよめり
吉原のしる出羽奇りししりゆりゆき
しるゆりしとよめりゆりゆき

出羽辨

道りての之れは西のれゆきしるゆき

久

大和玄經信

先代の吉原のたよめりしるゆき
しるゆきしるゆきしるゆき
ゆき

新院六條

乃永あつたしるゆきしるゆき

よはわん限のたれしるゆき
人の久しるゆき

後人

今かゝるも人馬たれしるゆき
あまゆきしるゆき

徳後頼朝下

かゝるも事たれしるゆき
年比物しるゆき
ゆき

た

かゝるも細言のれ様れしるゆき
男のたよめりしるゆき

ゆりをねてつらう

志社の長めり乃排とまげあふ事成方たふん

後朝慈れ公と 義堂歌補叙長

あまきゆり胡のさひひりくぬきしゆのさきり

人のしんせめて恨て独ぬきまじきまじき

まじきあふまじきまじきまじきまじき

申居文おね

ふじりたるあまの地ゆふまふあまは独ぬき

藤長巻とつらうまじきまじき

修理大夫歌子

運んぬいともまじきまじきまじきまじき

人のたふまじきまじきまじきまじき

よめり

一文紙修

まじきまじきまじきまじきまじきまじき

巻人まじきまじきまじきまじきまじき

の終りまじきまじきまじき

巻人永実

まじきまじきまじきまじきまじきまじき

因防内約まじきまじきまじきまじき

ことしまじきまじきまじきまじき

源信宗叙下

まじきまじきまじきまじきまじきまじき

まじきまじきまじきまじきまじき

元来大史経忠

金れぬるよさをたてた夜ぞのぬれはけを海まで
 人と恨くよめる 大中小補弘女
 ありあけの月をさしめたる道に花と入るる
 三井寺まで一人、悲声、よけこころおある

僧勢之圖

清江大馬人いづら世に秘風秋をよこし
 せしひより女の汗おのりんとしは
 さりありありしてしりたりたるはあり
 のはとより毎作りたり

よこ一人一に

花見のよさをたてた夜ぞのぬれはけを海まで
 大兵衛繪交能

馬の道にふるまはれり五月梅とみははる
 たのこ一人
 ありあけの月をさしめたる道に花と入るる
 三井寺まで一人、悲声、よけこころおある
 ありあけの月をさしめたる道に花と入るる
 三井寺まで一人、悲声、よけこころおある
 ありあけの月をさしめたる道に花と入るる
 三井寺まで一人、悲声、よけこころおある
 ありあけの月をさしめたる道に花と入るる
 三井寺まで一人、悲声、よけこころおある
 ありあけの月をさしめたる道に花と入るる
 三井寺まで一人、悲声、よけこころおある

とよめり

徳歌園抄下

林邊のさかきけりしよまらよのほまの初めりかきし
垂丹の人のこころのふよめり

源後頼朝下

信じてやいほ事れあはれ
あまのまゝとよめり

徳行宗彩下

はゆりかみひあひえとたまふとよめり
後忠の家中の垂丹の十首人のよめり
とよめり

源後頼朝下

あまのまゝとよめり

金葉和歌集巻第九

雑部上

ひりー道方よよくてつりよめり
てあ系守よまわりあえん結方よみま
のむめれ我仕小月つりてはれまほさ
一同一さままき花のままよめり
あまのまゝとよめり

大納言経信

神楽の青よりは梅の花とよまらよめり
山家鶴よとよめり
あまのまゝとよめり

権政九次下

あまのまゝとよめり

あまのまゝとよめり

園宗寺の花とあはれしめて後三条院
あまのこゝろおしりし出くともせせり
たり

三文

極楽寺とふさふさふさなる花は我れは
花は人あまのこゝろと妹の内約乃許しつ
たり

推信正永縁

ゆきれたあまのこゝろとあまのこゝろと
かゝり

内侍

とてあまのこゝろとあまのこゝろと
大奉中くさひとあまのこゝろと

あまのこゝろとあまのこゝろと
あまのこゝろとあまのこゝろと

あまのこゝろとあまのこゝろと

堀川院の時殿上人あまのこゝろと
ありきとあまのこゝろと
とあまのこゝろとあまのこゝろと
あまのこゝろとあまのこゝろと

源行宗範下

あまのこゝろとあまのこゝろと
あまのこゝろとあまのこゝろと

源定信

あまのこゝろとあまのこゝろと
あまのこゝろとあまのこゝろと
あまのこゝろとあまのこゝろと
あまのこゝろとあまのこゝろと

右近お曹泰重方

二行に小名をくわすにほまきりたれ物思ひを
けりしめ一のばまろのよらうあまき
事なんあしをれよめり

藤原成仲朝臣

年おれまふちぬ津あきふをさきあき
差人切りては時祭の陪送一結
きよ右中弁修家よりきつて

兼原推信朝臣

山吹と物さしはれをれ雲井は標を
隆家つて大宰府に二ふひありては
のこひ香推社よりつりありまろ
一神まよめりはのこひあて候

のうらやうよきとてよめり

神主大膳茂忠

千早振をぬるれ松のよき三度かき
徳心府まよきりて初くあまのりり
きりよきとてあまき新よめり

良暹法師

きりよめり
きりよめり
きりよめり
きりよめり
きりよめり
きりよめり
きりよめり
きりよめり
きりよめり
きりよめり

兼原家總

思ひまふちやゆかふとれ通好
一品文天王寺よりせあひく目録

念佛せきあまうひたうよあともの人
作言よあわくう方語々々よめり

徳後頼朝ト

いさめかほぬん位言能行と指代ん地と結き
田家老翁之のうとよめり

中納言其公長

ますかお馬房つりふ老まうりも
仁和寺よりしませあひたりはるさ
ていふとくもこより人のさうり
アまひんよませあ人歌

三三

あしてとえそははしちか里は御言のん公をま

大宰守の生のそあひよめり

僧正行

草紙巻の何あきことひんん
良暹法師とさゆり事
き一日よまうしてさく又久
さりあひしひつり

律師慶範

春めこと有つら
對山侍目こと
あはる正季

こなふあある月どのま
由家とそまぬ乃月と
あはる

金巻九

三

金

五

真のりり月月の歌を傳授せしむる

山寺二月乃あつたりたるふ経

とまどやうく月の花をたれりある

平康貞女

穿つて後有るははひり借るる海をす

宇治前大政大長門の奇ふこと

月のあふりせりたるよとれくと

写りしつりたる

徳師光

言日如きつき照りしよき始りたる

僧於頼基光の由よことりぬと

てつりたる 攝徳元

後尤西や月教乃公事

僧那頼基

郁芳の院侍傳よおりしは

ゆくりたる時よめる六條右大臣

仲正の女皇后交よ初く

たるとは初とひくとまきりせ

せあひたれつはまのひき

園てんもまひりややくひ

一

一

一

八雲集

歌

のわい

接律

雙松葉松風小がうきんあひ乃ほ小川つる

久

羨遠

秋と移る山の松風さうのここと秋のあひひ

月のあつかりさうあ人の望みよくとまて

てよめり

内大臣家越後

梅風六月の露をかきやあまをむむれとこの地

伊豫園乃二見浦中くよめり

大中長捕弘

平にわさむかふかひさのまきあふあつ松立

空治あま政大臣布引の松又小刀

くりありたりことよめりてよめり

大納言経信

あまのうきんあひ乃ほ小川つる

よこ人

天河を流乃末ありんあつ布引の露

遣子内親王のあつ小あひひはさうの時女

房小物アさむとてあつさうりさうり

よこあひひともいふあつ人そとあつま

くしてことせつるあつあつ紙よ書

てとくせつりたり 羨遠推叙

神垣あまのあつあつあつあつあつあつ

郁芳門院伊豫乃あつあつあつあつあつ

条右大臣少方あつあつあつあつあつあつ

八雲集

八雲集

多時さひうけもりのいふ乃初めは
きあふをいふやめり 宗右大臣少将
信恒おたりと宗少将守基のいふを名取信房宗元
前所文後俊成はあつははらう時察政
やいとう一えまりの頼との井越の建
うよまぬどうりて行もく是と忌れて
ゆうくし逃さるると多事平と申しり
多時さひうけもりのいふ乃初めは

宗元文内侍

ふせいのあつとちりあつた夜進多き秋分あつた
和采式部保昌よりうへ丹後國は
多時さひうけもりのいふ乃初めは

内侍新よもいふとくはく坊多と中御
言定頼つ子ののりよまきうききく
いふのせき後孫丹後人うらり
多人もやつひまきとていふやいふ
あつたあつた人あつたあつた
いふとくはくやめり 小式部内侍
大いふの道内遠をいふまきいふと
百首あつた中はあつたのいふやめり
いふとくはくあつたあつたあつた
百首あつた中はあつたのいふやめり

泰議師頼

宗元

宗元

とまよふふのあしはのあきなりはは小橋はひ
 こ乃集撰一きり時きこくはく道と
 よめり
 養老ふの物ゆへははれは乃云の雲ははは
 三月也あまは西乃中もは方人月ありあり
 くらよらるといふ物とらうらうははを
 やこららむまめのみし人はらりて

平康貞女

かふ播入只浪はは海り若らうと乃今ま
 抄一むしめ

百のあまのま風とまか野は神はくせと三同
 和泉武部石山よカソのきりて大儀り

とまのりてあまをくまをい人のあまひ
 あまにしてのくきりくら君をいあ
 のまられめらまはひあけけはらありと
 しかるまをまよめり和泉武部

まはあまはあまらふまらつてはあまをけはらそ
 云まののりし小川のりまはあまははらさ
 アまはあまはあまらふまらつてはあまをけはら
 ままひよ是はあまらつてはあまをけはら
 おのやゆりてらまあまのまは時房ま
 くとまきくつらつてはあまをけはら
 院のあまらそとくまはらつてはあまを
 ありまはらあまらふまらつてはあまを

後原時房

男中ねくよありて程なくさういふにねく
後人よきくありふりきりて申と受
てあげさるる人ふりてよめ

妻と夫と云々

大貳資通並ひく物り多くと程とさく
さきまの人の申さへんよめ

相換

肥後門内男よきとさくさくさくさく

と出たり一海くさきひりつ

堀川院出初

早き池小はねり、水車扱とさきよめは
例のあねのさきくさくさく以上東門
院よ柑子をさつ一々人よさきなり

堀川右大臣

上東門院

はつりて成れ程とさきあねさきさきさき
あくく
さきさき月日扱とさきつこのさきさきさき
信正行さきさきさきさきさきさきさき

ついでに悔りたるを独断と云ふは
孰れや

大徳言宗通

草花さしは程は三あめをいふとあまそ
男公よりてまゝして守りよりふた後と
まゝりたるあまそをとりふとせり
くれんうさげくつる

梯井片

るえうはほろはるるをさるまよきとて
後冷家院の時 近江の園より白き鳥
とせりしりまるとつて人かき
せ給はるりくれん女房連ゆり

くれんどのくまうこつて
とらん人よんまんとあせりのあり
くれんはくまう

おおむつ

あひまふふ白と身あはれゆは
甲斐園よりりのありておらるる人の汗は
まゝりたるれきと事やくそのおがかり
そとそかいしり

あはれまうひまうあまそ
百そあれ申小山家とよあ

修理右史歌季

堀の殺斗もるは... 入且坂守ふまを...
たい... 兼虎仲実頼卜
本丸我... 兼虎仲実頼卜
致上... 兼虎仲実頼卜
兼虎仲実頼卜
平忠威頼卜

まろ... 内大臣家山大進
男の... 兼虎仲実頼卜
兼虎仲実頼卜
兼虎仲実頼卜
兼虎仲実頼卜
兼虎仲実頼卜

兼虎仲実頼卜

兼虎仲実頼卜

今もふくまのまゝにひくさつた女とのうきさ
保實のつりふらりく後ふらりのま
つひよんらり後ととせつたれらき
うと申らるるをささてよめり

黄忠実佐母

おりのまふれ共寺鏡掃りしをよまも
月のうらとんくよめり

徳師 賢朝長

西の心雅と何る物と日なりれを山の月
為仲朝長陸奥守やと結らり時延任
まつてささてつりまら

黄忠実佐資

ま我のま八十ふ成りうとわふ後川をささりめ
まき人の春日小舟のりめ鹿乃
わりつらりて申らるるをささて
よめり
三差山神祭のつらるるをささりめ
屏風の絵よまらるるのとりり人
まらるるのけ敷をよめり

黄忠実朝朝長

何れをささるるまらるるのりや
たのり
身はまらりしとまらるるのり
皇右文義佐

上陽人若家多少思若老若若
公とよめり

源雅之

青月黒畫眉、細長こころ事と
よめり

徳後頼朝

るく久く休のしありさそく
あはれゆるんく人をとせ
あひくんくは事れおやと
又思くくくくくくくくく

とのかよき
くくくくく

僧正行

大中後捕弘きまふとわ
祭主小あきせました神
ひくねつりよりくあね
あね人の立くよし
草花のあひも
六條右大臣六条家
りりりりりりりりりり
こくくくくく

歌雅之母

千尋とてまじり泉は庭深き新あり
宇治平等院のまじりて宇治よ
もかんつとくひえは山のくこあまや
てくよめり 忠投法師
うちの庭のくちへ成りてけり
家と人よとるちくくして
つげゆりたり 因防門侍
任俺と我之物り成りて
笑み成助よ初くあひく物り
かくよめり

守りてまじり海は深きく
津守國基

後頼朝のひそそ多り
皇太后弘徽普女よ
人よ物りゆりふれ
りやれしよよめり
とてまじりて
あうれてゆめり

石海とてまじり物り
人魚行蓮聖人
天台座主仁覺

よめり

あはれいふふをいひるをれしうしむ神せつともるを
百首方れ中ふ述懐れ公とよめり

徳後頼朝信

其申さし此ふまらるれ思ひもれを風行
男小つまきく致す困よはかりいりあるふ
おしこ公うりて子よらいふを思
まふありおや乃りてふひつりあ

ふしんく

訂校す人の心あらしめあはれをき極おもふ

たや

思ひろくを之社をけれあらしめあはれをいふ
ありありのけりるはよめり

泰儀師頼

後らう月日とあはれしと母ふ福をうけり

あふんとあふふ小乳のうりりといふ

徳師賞朝信

かりけりしはきとらうにちその物乃欲とまら
希を政大臣は家小侍る女と中おた系初
信とお将取四こととふくういひはるふ忠
宗よあひいさうその後程とれくまはり
とやる女のうりひつり

徳取四朝信

あふまはれをきくあひらひあはれをいふ
あふ人親降りかよりあはれをいふ

徳取四朝信

徳取四朝信

くろくろ

教教教

雲は小別は物とあふれわさこはさかりのあな

堀河院治時源俊重う式部丞下より

戸又よそく頭弁ま貨うりてくハ

日丸之わさひのさか風をさか我力いよふ雲が好

美とそくくやれし門侍因防とめて

これら西一せしきゆりせりのまを風

はうくまらぬく 因防内侍

まふ春は嵐小雲晴くまをさか新い雲をさか

まのちありふりくさく

金葉和歌集卷第十

雑部下

云實つめれ結くはらの家よはかり

梨々よ小梅花盛よさくくをんく枝よ

結ひ結くくくくもくさ

若菜其公後

昔はたよりやま梅のの花さ我小梅のさ

か人 中初言実り

種は海の花のさか無くはくま梅のやがきと説

人におまこくくく花見ありさくくくくく

後風おこくくくくくくくくくくくく

多人のれより物事ふくくくくくくく

平基總

梯のふしし風乃御はまゝく是らうらまゝま致意
後三条院これありはて後世の
一京宮れ忠懐よさうぬせせつらふ梯の
他り花のされうらまゝいそよめつ

美意を結節也

あまほのころ中おれうら花梯の
小方うせつらな天王寺小しりまらな
よそよめつ

六條吉太郎

難波宮のころ風を吹かすゆめあまほの
都芳門院これありはて又のまは秋
知照うらうらまゝ

康資王母

うかり小姑うらまゝいそよめつ
あまほのころ中おれうら花梯の
よそよめつ

美意を結節也

出羽宮の秋を思ふまら別乃をくあらわらて
下福よこえつらて秋結なうらまゝ
後頼朝也

後頼朝也

下福よこえつらて秋結なうらまゝ
あまほのころ中おれうら花梯の
よそよめつ
くまをうらまゝいそよめつ
ゆかり女房もつらうらまゝ

のしおとさうあいらをねは後備さく
しとせ、うりてえれんまらこのんこ
うらふ加えそへりまらこい

まん人しん

五くをうけとふらりともきりあ、親おのり
大徳ふ子と捨て結多うとすくくよ書
つげ結多うこい

あふまいらあまのりやん子あ人方あきまをね
あいの守お徳ふとれ結多うはあうこれり
う人のあうさうてゆりうらうとさうて
よめう

流ととあ原あまうり國の徳は漢と何やん

こらまのあうり結多う此人のあうい
うまのりうらうをれもよめう

長所あう一況めうああも七何言たしあまを
お転永物長あ家一あうさうて結多う
まらうりうらうの固らういり

あま通宗物

あまのりよとあまのりあまのりあまのり
律師長海之れくあ母のああ
とまのりあまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのりあまのり

金部 三
るういひよつていふてよめり

大藏少輔房

そのまじりて款也まじりてくわいふるもいふ
後二位右近衛賢子倒あつぬまありてい
ろの公をくくかぢくつるよ人の行より
いふまじりていひく結をれしよめり

右近衛賢子

いひ八月のまじりて小今日と待我能也り

此まじりては久しうありふりぬと

まじりていふめり 権僧正永隆

まじりのまじりていひはれまじりていふまじり
人のまじりていふのまじりていふまじり

泉上貞と母

かりて痛とてくれえとていふまじりて
かりていふまじりていふ

まじりていふ

まじりていふまじりていふまじりていふ

小式部内侍いふまじりていふ上東門院より

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

いふまじりていふまじりていふまじりていふ

陽明門隠之れかりしはして後水まきの
し早く又の自雲れまのりなきとらんく
よめり

実のさしとくしと雲そきあつれさる烟とさそ

白河院乃女おれぬく後々の家督
而乃義の花威よ味申しりきりさそ

信正行き

草木ささひさりたさるはほまの夜きたれハ

道房月は重服よありてさりあくる

さふ出相辨り件よりさふひさりきり

とそりさそりさりさりさりさり

拙者任

はさのたき乃まありありとくふさし

範圍朝は小くして後と國は海よりさ

さふ正月より三月月ささりさりさり

さりをれさふりろせせささりさり

さささされとささりさり守徳園あ

ささささささささささささささ

ささささささささささささささ

天の苗代水小せささせてはさす神あり

神威ありて大敵ささく三日二夜さす

と家集一とんさり

心経供類一とさのふと人くよささ

ささ

拙者任

多きかしのほととまろ法をいれ行る下かきと移き
法文のありまろとこころの女房れ行り
まより寺ももあくあつてまよふとて
みくりありまろとりのまてまよせぬ
ひまろ

三文

況まふ我はさうとてはてうまうまうとまよま
月のありありまろ大膳西上人のまろ
うりまろ

信三行

いこまよ空かきまよ移まろまろまろ移まろ
例まろぬこまろまろまろまろまろまろ
毎まろまろまろ

法行宗部

いこまよま世中まよこまろまろまろまろまろ

房範聖人山寺おこりりあぬまろまろつ
うりまろ

新殿法師

心おひまろまろまろまろまろまろまろ
八月廿五日午前多夜あまら聖の
まろまろまろまろまろまろまろまろ
房小ひつりまろまろ選子の親ま

いこまよまあろ教書まろまろまろまろまろ
後釋迦達教念阿弥陀とままろまろまろ

皇后文肥後

教書まろ八月廿五日まろまろまろまろまろ
清海上人後まろまろまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろまろまろ

信三行

法行宗部

かやうにちてふ所の咄とえくらりたてのいふまじり
 普賢十願の文より我世欲命経時と
 といふ文とよめり 覺樹法師
 今も罪ととあふたをりはにり名清じと
 衣冠如雲あといふる文とよめり

賞善法師

罪ととあふたをりはにり名清じと
 第五の公とよめり 僧正教田

咄とえくらりたてのいふまじり
 提婆宗の公とよめり 瞻如上人

法の為にあふたをりはにり名清じと
 皇后文權大支師

かやうにちてふ所の咄とえくらりたてのいふまじり
 龍女衣佛とよめり 勝超法師
 白鳥海空の公とよめり 權僧正永縁
 うちひかゝるまゝのいふまじり 不輕公乃公とよめり 賞雅法師
 と罪を法とひらぬ聖とやけん人と道公はら
 薬王公とよめり 懷為法師
 今も罪ととあふたをりはにり名清じと
 人のいふまじり 純信養一とよめり 九百身
 子授記を公と読たりお懸宗実珠れと
 といふとよりとよめり

とれ子姑ひつげくゆらくとてんぐ西
おろこゆらう 権信正永縁

縁てなほとありぬ人のひもさあ人もあま
維摩依他乃八のたしひと人こころをさふじ

此如知く事と移る懐尋法師
いそ清くさひまともをまめけつなむとる

常任公月輪とてくちをさしめり
一 のりい 浄法行 誠一

とてま中おしゆ月とありともち結請るこれ
とくらととらんとてしり事と

とて海江波くさふとらんとてさふおのあまのしり事

醍醐乃舍利會小花乃教とるたてある
珠海法師母

比獄乃絵小釘のえさふ人乃つてぬらたこ
ととてんぐとめり 和泉式部

人のはりゆらふ小儀ふとめくうせむじ
とてなへととてけしふさうとてかやう

あうらうとてあのおのあしとさうむ部され
あうとていさふとふよめり

田口重和

草水小がとてまう部とてとらぬらとてあま

かくてつめいありつゝしてしめり
たゆまざるをせむるゝとて佛をやりめりぬらひて
障子れぬるは天王寺の西門にて法一舟
よのりて西へまゝいこさるゝぬらひて
くけりてせよめり 徳後頼朝
いふはとあつたをせむるは長長とていふとて博
連歌

わたりやうとれぬのうらふをせむるは
いひ多るをせむる 永成法師
あまふらとていふとていふとていふとて
律師 兼 文範
みらぬふらとていふとていふとていふとて

とていふのうらふとて 頼経法師
とていふのうらふとていふとていふとて

梅津乃梅はらりぬらん
云 資朝

類聚乃書社を物つてきれとていふとて

神主 成助

あはれとていふとていふとていふとて

行童

いさろとていふとていふとていふとて

宇治中田の中ふとていふとていふとて

僧正 保光

春比田ふとていふとていふとていふとて

おの水はふあせりぬや 宇治入道公の御書

日の入と見ん 觀蓮法師

月影のいづれを井や 平為城

平為城

あつひ守こもかりひらろの那

甲申の馬はあつろと見ん

永源法師

甲子のいじこりいづろあつろありき

永源法師

あつろ乃水ふれと見ん

あつろ乃水ふれと見ん 徳人

おのの板あささつろと見ん 助成

おのの板あささつろと見ん 助成

おのの板あささつろと見ん 助成

おのの板あささつろと見ん 助成

國忠

おのの板あささつろと見ん 助成

おのの板あささつろと見ん 助成

おのの板あささつろと見ん 助成

頼徳

おのの板あささつろと見ん 助成

おのの板あささつろと見ん 助成

おのの板あささつろと見ん 助成

信總

うりまはをのわーこひひ

わあをん

よまん

あやいあやをあわーいあひん

進房の妹

うまふいさりいれり一抱をあひ川のあ

和泉武部のかとよひのりまのよひ

よあをんからあひんこもまひんこもまを

ん

神主の兄

ふんやううこもあひまのあひ

和泉武部

これとそーの社といひ

源頼光の傳る身よそののりたる時
のあふけの川といふ川わうくこもり
まのりたるを蘇わうさあひまを
とあひあそとそそのうりてまうらり
といふとまてからとまひん

源頼光の伝

あてうら母のともありま

是と連あふん

相模母

あひまひまかろれま乃まこあひ

よまん

花んさひらうまあひまあひ

あまの政之原家本御四手
 風りまあくうていありまあり
 しまし草とつふまれあかりまをり
 もてとせたるをんそく

うさへ
 ひくふまもたまもまひ草のね
 とつてふいようあくうらう花あれと
 鳥とあふふくくうりたうりまこあまれ
 多くとんあ

あふれまきしと志とくふ流ふたり
 けいきたうくうらまきしやん
 兼りるむめむれまらたはあらし

尺

律師文選

はじめの花うさきまありと乃ひ
 まあうらうらうのつまけり
 ありい風やうやかりん
 うのあよりうさきとんそく

頼母法師

あらしと尺れとくま
 後人
 終のまふらうまきりたうとまきり
 ふうと人
 ふうととあり終れ

今りえーひつとちうしーいふれと
極をえんく 疎光

ねくちうとやーらさひつふ
觀蓮法師

尺ささせんいふと戸をいふてくたり
七十一ちうちてけさくとあてあふよ
あーきしとをわひつてく

あふしふみちある後乃らまは
源後頼朝

えーくよとびりれわろのれ

巻第七 燕舟上

攝政元大臣家より燕のゆと読書

藤原為真朝臣

あふれきとよき由の森は復よまき社祓方也れ
たのめそあふぬ意 なる京親隆朝臣

意ーあふんつらよ今迄もたのむれ社つたまら系
在あふも下るなよたよ上

山の歌合よ燕のゆと 隆号人法師

あふれ程と思ふらあふ事此をつれきとの情さるふん
在面歌下浅まーや上

燕のゆと 琳貝法師

あふとつとよとあふちや紅の洞は深る神やふと

在遠見ての下いつとるく上

卷第八

急所下

題一ら次

読人不知

いとせめて急所下は播磨の事と云ふは下は源の事と云ふ

在急所下は下急所と云ふ上

右之急所在失本

